

# 英語教育の充実に関する研究

久本 卓人<sup>1</sup> 齋藤 麻紀<sup>1</sup>

平成32年度の次期小学校学習指導要領実施に伴い、小学校英語教育は大幅な充実が図られることになっている。本研究では、小学校英語教育充実に関する施策や議論などを参考に、指導体制や目標設定、教材及び学習内容の在り方などに関して各学校に求められることを整理した上で、教員を対象とする校内研修プログラムの作成を行い、小学校英語教育の充実を目指した。

## はじめに

教育、経済、文化など、社会のあらゆる分野においてグローバル化が進展する中、国際共通語としての英語力向上は日本の将来にとって極めて重要である。文部科学省は、初等中等教育段階からのグローバル化に対応した教育環境づくりに資する小・中・高等学校を通じた英語教育改革を計画的に進めるため、「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を平成25年12月に公表した。

また、これを受けて平成26年2月に設置された「英語教育の在り方に関する有識者会議」は、小・中・高等学校における英語教育の充実に係る検討を進め、その審議のまとめである「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告 ～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」(2014) (以下、『英語教育の在り方に関する有識者会議』報告) という)において、小学校では「中学年から外国語活動を開始し、音声に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。高学年では身近なことについて基本的な表現によって『聞く』『話す』に加え、積極的に『読む』『書く』の態度の育成を含めたコミュニケーション能力の基礎を養う。そのため、学習に系統性を持たせるため教科として行うことが適当」と、「外国語活動」の早期化及び教科化や、学習内容として「読むこと」、「書くこと」を新たに扱うことを提言している。

一方、中央教育審議会教育課程部会小学校部会では、音声中心で学んだことが中学校の段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていないこと、国語と英語の音声の違いや英語の発音と綴りの関係の学習、文構造の学習において課題があること、高学年は児童の抽象的な思考力が高まる段階であり体系的な学習が求められることなどが取り上げられている。

これらの背景を踏まえ、「外国語活動」は早期化及び教科化という形でその充実が図られることになった。平成32年度より次期小学校学習指導要領が全面実施

されるが、英語教育に関しては、平成30年度から段階的に先行実施される予定である。

## 研究の目的

本研究は、小学校英語教育の充実に関する施策や議論などを参考に、指導体制や目標設定、教材及び学習内容の在り方などに関して、各学校に求められることを整理した上で、教員を対象とする研修プログラムの作成を行い、小学校英語教育の充実を資することを目的としている。

なお、本稿では、教科や著作物などの名称及び引用部を除き、原則として「外国語」ではなく、「英語」と表記した。

## 研究の内容

### 1 指導体制についての整理

#### (1) 現状と課題

次期小学校学習指導要領の実施に伴い、高学年においては、「聞くこと」、「話すこと」の活動に加え、「読むこと」、「書くこと」を含めた言語活動を展開し、教科として系統的な指導を行うために、年間70単位時間の教科型の学習を、中学年においては従来の高学年で実施してきた「外国語活動」と同様に、年間35単位時間の活動型の学習を実施するとされている。この増加した授業時数に対応するための指導体制については、『英語教育の在り方に関する有識者会議』報告の内容から、次のように整理することができる。

中学年：主に学級担任がALT等とのチーム・ティーチングを活用しながら指導する。  
高学年：学級担任が英語の指導力に関する専門性を高めて指導する、併せて専科指導を行う教員を活用することにより、専門性を一層重視する。

中学年ではALT等の活用、高学年では専科指導を行う教員の活用というように、それぞれの発達段階や学習内容を踏まえた指導体制の構築が求められている。しかし、いずれにしても、学級担任が中心となること

1 教育課題研究課 指導主事

に変わりはない。小学校においては、児童と接する時間が長く、児童の実態や他教科の内容も熟知している学級担任が「外国語活動」及び「外国語科」の授業を担当することに大きなメリットがある。この点について、直山は、『Hi, friends! 1』の「ランチメニューを作ろう」において家庭科で学んだ内容と関連付けた学習を例に挙げながら、「英語が堪能なだけの人が指導したのでは、高学年児童の興味・関心を高める授業は成立しにくい」（『日本教育新聞』2014.9.8）と述べている。

一方、実際に授業を担当する教員の不安や負担感は、これまで度々問題になってきた。「平成26年度小学校外国語活動実施状況調査」（平成27年2月実施）によると、「自信を持って指導している」と回答した小学校教員の割合が34.6%にとどまる一方、「準備などに負担感がある」は60.8%、「英語が苦手である」は67.3%に上っている。「外国語活動」を必修化した小学校学習指導要領の告示から6年が経過しているにもかかわらず、不安や負担感を抱えながら授業に取り組んでいる教員が少なくないのである。

さらに、米崎・多良・佃は、英語教育の充実における小学校教員の不安について、アンケートを実施し、その結果から「教科化および低学年化には『教員の英語力・指導力』『国語や他教科とのバランス』『児童の負担・混乱』に関する共通の不安が抽出され、また教科化のみの不安として『評価への不安』が、また低学年化のみの不安として教員の『小学校英語教育の本質の理解』が抽出された」（米崎・多良・佃 2016）と述べている。

## (2) 今後の方向性

今後、ALTの配置に対する財政措置の充実や専科指導を行う教員の配置など、地域や学校等の実態に応じた指導体制の構築が進められていく見通しであるが、特に指導体制の中心となる学級担任に対する研修の改善・充実が重要である。しかし、それは単に研修の時間を増やせばよいということではない。次期小学校学習指導要領実施に向け、今後、各学校や教員が取り組むべき課題は、非常に多様であり、それに伴う負担も少なくはない。次期小学校学習指導要領が目指す方向性を踏まえて、研修内容を焦点化する、あるいは、今まで各学校や教員が積み重ねてきたものを発展させるという視点での研修の充実が重要である。

## 2 指導における目標設定についての整理

### (1) 各学年における目標設定

学校では、年度当初の授業開始までに各教科の年間指導計画を立て、一年間の指導の見通しを立てている。「外国語活動」の早期化及び教科化においても学校や教員がまず取り組むことは、それぞれの学年で児童にどのような力を身に付けさせるのかを明確にすること

である。そこで、ここでは、各学年における目標設定の在り方について整理をする。

### ア 各学年における英語教育の目標

まず、各学年における英語教育の目標について確認しておく。文部科学省から示された「外国語教育の抜本的強化のイメージ」では、小学校中学年及び高学年における英語教育の目標が次のように示されている。

中学年：外国語を通じて、言語やその背景にある文化の多様性を尊重し、相手に配慮しながら聞いたり話したりすることを中心にしたコミュニケーション能力の素地を養う。

高学年：外国語やその背景にある文化の多様性を尊重し、相手に配慮しながら聞いたり話したりすることに加えて、読んだり書いたりすることについての態度の育成も含めた、コミュニケーション能力の基礎を養う。

（下線は筆者）

これによると、コミュニケーション能力に関して、中学年では「素地」を、高学年では「基礎」を養うとされている。「素地」とは、小学校段階で「外国語活動」を通して養われる、言語や文化に対する体験的な理解、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度、外国語の音声や基本的な表現への慣れ親しみを指したもので、現行の小学校学習指導要領における「外国語活動」の目標にも示されている。一方、コミュニケーション能力の「基礎」を養うことは、現行の中学校学習指導要領における「外国語科」の目標にも示されており、教科化に伴うこれまでの「外国語活動」との違いを明確にしたといえる。

しかし、これをもって、中学校で学んでいる内容を小学校高学年に前倒しすればよい、ということではない。中学校「外国語科」では、聞くこと、読むこと、話すこと[やり取り]、話すこと[発表]、書くことの5領域をバランスよく身に付けることが求められているが、小学校「外国語科」においては、あくまでも聞くこと、話すこと[やり取り]、話すこと[発表]の3領域を扱うことが中心となるからである。

### イ 今後の方向性

今後、それぞれの地域、学校の環境や児童の実態を踏まえ「身近で簡単なこと」について、外国語の基本的な表現に関わる学習活動を設定する必要がある。そして、中学校教員は「外国語活動」や小学校「外国語科」が、現在の中学校「外国語科」とは異なるということを意識した上で、円滑な接続を図るよう、各学年における目標設定を行うことが重要である。

### (2) 「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標の設定

児童に身に付けさせる力を明確にするために、「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標の設定についても確認しておく。

ア 「CAN-DOリスト」及び中学校・高等学校での取組状況

「CAN-DOリスト」とは、CAN-DOディスクリプタ（あるいはステイトメント）と呼ばれる「英語でできる行動」をリスト化したものである。学習指導要領に基づき、観点別学習状況の評価における「外国語表現の能力」と「外国語理解の能力」について、生徒に身に付けさせたい能力を各学校が明確化し、主に教員が生徒の指導と評価の改善に活用することを目的としている。文部科学省は、中学校及び高等学校に対し、「各中・高等学校の外国語教育における『CAN-DOリスト』の形での学習到達目標設定のための手引き」（以下、「手引き」という）を公表するなど、「CAN-DOリスト」の作成・活用を推奨してきた。平成27年12月に実施された「平成27年度英語教育実施状況調査」によると、「CAN-DOリスト」により学習到達目標を設定している学校の割合は、中学校において51.1%、高等学校において69.6%であり、いずれも平成26年度の調査から10ポイント以上、上昇している。

イ 小学校での取組状況

小学校に関しては、文部科学省による英語教育強化地域拠点事業によって、「CAN-DOリスト」に関する取組の検証が行われてきた。「平成27年度英語教育強化地域拠点事業における取組状況（小学校）」によると、「CAN-DO形式の学習到達目標を設定している」と回答した強化地域拠点校の割合は77.9%と、8割近くに上る。また、その効果についても「指導内容の焦点化が図られ、児童に付けさせたい力を明確にした指導が行われるようになってきた」、「単元末のパフォーマンス課題を児童の実態に合わせて、楽しく工夫することができるようになった」という肯定的な声が紹介されている。

ウ 今後の方向性

この「CAN-DOリスト」について「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（2016）（以下、「答申」という）では、「外国語学習の特性を踏まえて『知識・技能』と『思考力・判断力・表現力等』を一体的に育成し、小・中・高等学校で一貫した目標を実現するため、そこに至る段階を示すものとして国際的な基準であるCEFRなどを参考に、段階的に実現する領域別の目標を設定する」、「各学校においては、国が外国語の学習指導要領に定める領域別の目標を踏まえ、更に具体的に各校の学習到達目標を設定する」と、今後の取組の在り方が示されている。今後、「CAN-DOリスト」の作成・活用に関する取組は、小学校から高等学校までの接続を踏まえ、進められていくと考えられる。

県教育委員会においても、これまで「CAN-DO

リスト」の作成・活用に関しては、中学校及び高等学校での取組を中心として進められてきた。「平成27年度英語教育実施状況調査」における神奈川県の結果によると、「CAN-DOリスト」により学習到達目標を設定している学校（学科）の割合は、中学校において46.7%、高等学校においては94.2%である。次期小学校学習指導要領に向け、小学校において「CAN-DOリスト」の作成・活用に取り組む際には、これらの取組も参考にし、異校種間の指導の連携を図っていくことが重要である。

### 3 教材及び学習内容についての整理

文部科学省では、次期小学校学習指導要領に対応した教材開発を進めており、その検証のため、共通教材『Hi, friends!』の補助教材である『Hi, friends! Plus』及び、中学年向けの補助教材である絵本やデジタル教材を全国の研究開発学校等に配付している。

本節では、絵本の活用と『Hi, friends! Plus』の指導内容である「アルファベット文字の認識」、「日本語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気付き」、「語順の違いなど文構造への気付き」の現状と課題及び指導の方向性について整理する。

(1) 絵本の活用

ア 現状と課題

文部科学省は、平成28年度に中学年の「外国語活動」早期化に向けた新たな補助教材開発を目的として『In the Autumn Forest』（第3学年用）、『Good Morning』（第4学年用）という2種類の絵本及びデジタル教材『Hi, friends! Story Books』を作成し、都道府県・市区町村教育委員会や研究開発学校などに配付している。

『In the Autumn Forest』は、森の中で動物たちがかくれんぼをする場面を扱った絵本である。児童は、どのような動物が隠れているのかを予想しながら絵本の世界を楽しむとともに、国によって干支の動物が異なることに気付き、世界の文化に興味を抱くことができるものとなっている。動物や身体の部位、形容詞などの簡単な語彙や表現を用いて、相手のことについて尋ねたり、自分のことについて話す表現に慣れ親しんだりするとともに、日本語と英語の音声の違いに気付き、積極的に自分のことについて伝えようとすることをねらいとしている。

また、『Good Morning』は、主人公である男の子が、自分の1日の生活をブラジルにいる友達に紹介するという設定の絵本である。男の子の部屋のカレンダーから飛び出した猫が、男の子を追い駆けて学校や公園へ行くというサブストーリーが設定されており、児童の豊かな想像力をかき立てるものとなっている。挨拶や感情表現、日課や学校生活などを扱ったまとまりのある話を聞いて、児童がその概要を理解し、動作を表す

簡単な語句や表現を使って、積極的に自分のことについて伝えようとするのをねらいとしている。

また、授業においては、市販の英語絵本を併用することも考えられる。英語絵本の中には名作と呼ばれ、英語を母語とする子どもたちに愛されている作品も少なくない。そのような作品は、日本と外国との生活、習慣、行事などの違いや多様なものの見方や考え方があることに気付かせる教材としての価値も有している。

ただし、注意したいのは、それらが、小学校における英語教育の教材に適しているとは限らないということである。市販の英語絵本を使用する際には、作品の題材や使用されている英語の特性を捉えるとともに、他の教材との関連性はどうか、児童の実態や授業のねらいと合っているかなどの点に配慮して、適切なものを選択する必要がある。

#### イ 方向性

リーパーは、入門期の英語習得プログラムとして、絵本を活用した指導法とともに、作品の選び方について紹介している(リーパー 2011)。本研究ではこれを参考に、英語絵本の選び方を次のように整理した。

- 日常使われるやさしい単語が入ったもの。
- 文とイラストが合っているもの。
- 表紙や本のタイトルが、内容を語っているもの。
- 物語の展開が明確なもの。
- 児童の生活体験から、あまり離れていないもの。
- 単語や表現が、他の教材と関連性のあるもの。
- 単元や本時のねらいと合っているもの。

なお、どれだけ優れた教材も、その魅力を引き出し、効果的に活用できるかどうかは教員の働きかけにかかっている。「中学年を対象とした、絵本活用に関する基本的な考え方」(文部科学省 2016)では、絵本の読み聞かせにおける留意点として「指導者は、ジェスチャーをつけ、表情豊かに読む」、「絵や筋について時折質問をしながら、児童を絵本の世界に引き込むようにする」ということを挙げている。また、絵本を題材にグループでオリジナル絵本を作ったり、劇やペープサートを使って演じてみたりさせることで、その内容を楽しみながら理解させることも可能である。

しかし、金森は、英語絵本を活用した指導には児童とのインタラクション(相互のやり取りや触れ合い)を起こす高度な技術が必要であることを指摘している(金森 2011)。これまで培ってきた絵本の読み聞かせに関するノウハウや技術をいかすだけでなく、児童に何を身に付けさせるのかを明確にした上で、小学校英語教育にふさわしい授業づくりに取り組むことが重要である。

#### (2) アルファベット文字の認識

##### ア 現状と課題

小学校学習指導要領では、「外国語活動」における文字の取扱いを「児童の学習負担に配慮しつつ、音声に

よるコミュニケーションを補助するものとして用いること」としている。そのため、これまで小学校において本格的な文字の指導が行われることは少なかった。しかし、「平成26年度小学校外国語活動実施状況調査」によると、中学1年生の8割が小学校で「英単語・英語の文を読むこと」、「英単語・英語の文を書くこと」をしておきたかったと回答しており、「小学校で英語の読み書きについて学びたい」という児童の思いがあることがうかがえる。

#### イ 方向性

教材や指導の仕方に関する今後の方向性としてまず考えられるのは、児童の生活経験をいかした教材と学習内容の充実である。『Hi, friends! 2』の「アルファベットクイズを作ろう」では、町の挿絵を見て、見たことのあるアルファベットの表示を書き写すという活動が設定されている。このように、児童が生活経験の中で馴染みのある単語を取り上げ、そこで使われているアルファベットを読んだり書いたりすることで学習内容を充実させることができる。

次に、「話すこと」、「聞くこと」の学習の中で、児童が自然に文字に触れる機会を作っておくことも考えられる。現在、『Hi, friends! 1』及び『Hi, friends! 2』の絵カードには、原則として文字が記載されていない。このような絵カードに文字を添え、「話すこと」、「聞くこと」の学習で活用するのである。

その際、文字を与えるタイミングについては、十分な配慮が必要である。この点について金森は、「文字を頼りに発話するようにならないように注意が必要」(金森 2012)と述べ、同じ絵カードでも、「文字あり」と「文字なし」の2種類を用意し、意識的に使い分けるといった配慮や、「音声だけを聞かせる」、「絵だけを見せる」、「絵と文字の両方を見せる」、「復習として文字のない面を見せ、発話できるか確認する」という4段階の活用を紹介している。

その他に、自然と文字に接することができるという点では、英語絵本の活用も考えられる。伊藤は、英語絵本の活用を「文字を使つての指導」の一翼を担うものとし、文字指導に関わる英語絵本の特性を次のように整理している(伊藤 2013)。

- 基本的に幼児向けなので、比較的簡単な英語が使用されている。
- 外国語の学習に必要な繰り返しが盛り込まれている。
- 絵と文字で構成されているという絵本の性格上、外国語学習に必要な表現とコンテキスト(場面)の融合が自然な形で図られている。
- 読み聞かせを行えば、文字と音声と場面の一体化が自然な形で実現されている。

適切な形で文字を扱うことは、高学年の児童のやる気を刺激し、学習意欲を高める効果を期待できる。児

童の生活経験をいかしたり、文字が書かれている絵カードや絵本を効果的に活用したりしながら、児童が意欲的に学ぶことのできる授業づくりが重要である。

(3) 日本語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気付き

#### ア 現状と課題

平仮名は、「き」、「つ」、「ね」と書いて「きつね」と読むように、原則として文字の名称と「読み方」が一致する。一方、アルファベットは「f[ɛf]」、「o[óu]」、「x[éks]」と書いて「fox[fáks]」と読むように、文字の名称と「読み方」とは一致しない。このような日本語と英語の音声の違いに戸惑う児童は少なくない。

また、指導に関して、中央教育審議会教育課程部会外国語ワーキンググループでは、英語教育強化地域拠点事業における取組状況から、「指導方法や教材等を工夫しないと、発音することの難しさや書くことに対する抵抗感など、苦手意識をもつ児童も中には見られる」ことを指摘している。

#### イ 方向性

児童が上記のような日本語と英語の音声の違いや特徴について認識できるようになるためには、まず、身近な単語の中から特徴的なものを選び、繰り返し聞いたり話したりする中で英語の音声に慣れさせていくことが重要である。

例えば、『Hi, friends! Plus』には、アルファベット、動物、食べ物、国名などのジングル（唱歌）やクイズなどが数多く紹介されている。児童は、リズムに乗ってアルファベット順に並んだ単語を口ずさんだり、アルファベットカードを指し示したりしながら英語の音声に慣れていくのである。教員はこのような教材を活用し、繰り返し「聞くこと」、「話すこと」の活動をする中で、児童が外国語として知っている単語を、日本語との音声の違いに注目して聞かせ、違いを発表させるなど、児童の気付きを促すようにしたい。

機械的に単語を暗記させたり詳細な発音や綴りのルールを一方的に解説したりすることは、児童の英語嫌いを生み出す一因になりかねない。あくまでも、児童の気付きをねらいにした授業づくりが重要である。

(4) 語順の違いなど文構造への気付き

#### ア 現状と課題

日本語は「が」、「は」、「を」などの助詞の働きにより語順については比較的寛容な言語である。ところが、英語は語順を変えると、意味が変わったり通じなくなったりすることが多い。

例えば、「イヌが、ネコを追い駆ける。」という文を、「ネコを、イヌが追い駆ける。」と変えたとする。この場合、いずれの文でも、追い駆ける側は「イヌ」である。一方、「The dog is chasing the cat.」を「The cat is chasing the dog.」のように主語(The dog)と目的語(the cat)の位置を変えると、追い駆ける側は「dog」

から「cat」に変わってしまう。

#### イ 方向性

これに関して『Hi, friends! Plus』では、「A Letter to...」という絵本が収録されている。この絵本は、イヌ、ブタ、ウサギなど、様々な動物たちが追い駆ける様子をする様子が描かれたものである。「追い駆ける動物」と「追い駆けられる動物」が順に変化しながら「... is chasing the ...」という文が繰り返され、児童が自然と英語の語順を意識できるしかけになっている。

「日本語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴」と同様、「語順の違いなど文構造」に関しても、大切なのは児童自身の気付きを促すことである。このことについて金森は、知識を与えて終わるのではなく、体験的な「気付き」を促すために、自分たちの言語や文化と比較させる過程が必要であることや文法に関する知識は文字を読めるようになってから始めた方が効果的であることを示唆している（金森 2011）。

なお、小学校の高学年になると、文構造や語順について分析的に捉える力も育ってくる。国語科における学習との関連を図って日本語との比較から英語の特徴に気付かせるなど、カリキュラム・マネジメントの視点からの授業改善を図るとともに、論理的に思考しようとする習慣を育成する授業づくりが重要である。

## 4 校内教員研修プログラムの作成

ここまで、小学校英語教育の充実に関する施策や議論などを参考に、指導体制や目標設定、教材及び学習内容の在り方などに関して各学校に求められることを整理してきた。

今後、各教育委員会及び学校において、小学校英語教育の充実を円滑に実施していくための取組が進められることになる。その取組の一つが、教員の力量向上を目的とした研修である。

教員研修の改善・充実に関して「答申」では、英語教育担当指導主事や、文部科学省の英語指導力向上事業に参加した「英語教育推進リーダー」などが中心となって実施する各種研修、小・中学校教員相互の授業参加、合同研究会などを挙げた上で、「このような取組を通じて、学級担任はじめ全教員が外国語に触れ、外国語を指導する力を身に付けることができるよう、校内研修や外国語教育における域内の連携体制を充実させていくなど、各地方自治体の実態に応じた体制を構築することが求められる」としている。

また、東京学芸大学では、平成27年度より文部科学省委託事業として、英語教員の養成・研修のコア・カリキュラムについての2年間にわたる調査研究を行っている。その中で、子どもの第二言語の学び方の特徴や教材開発の仕方等の21項目が「指導に必要な知識・技能」として挙げられ、授業観察や授業改善などの4項目が「授業研究」として挙げられている。

このような背景を踏まえ、本研究では、これまで述べてきた課題に関して、主に「授業研究」に関する各学校における校内教員研修プログラム及び活用資料を作成した。このプログラムのキーワードは、「既存リソースの活用」と「ワークショップ型研修」である。これまで築いてきた学校の物質的、人的資源に着目するとともに、講義形式で受動的に「知識量」を増やすのではなく、教員一人ひとりが主体的、対話的に関わりながら考え、学ぶ内容となっている。

今後、次期小学校学習指導要領の実施に伴い、文部科学省による新教材や教科書会社による教科用図書が順次作成、配付される。しかし、学校によっては、それまでに一人ひとりの教員の指導力向上を図っておきたいというニーズも存在するだろう。今後、各学校の状況に合わせ、活用されることを期待する。

## おわりに

次期小学校学習指導要領実施に伴い、小学校英語教育は大幅な充実が図られることになっている。

小学校英語教育においては、言語や文化に対する体験的な理解と積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を養うとともに、中学校「外国語科」の学習との円滑な接続を図るよう、コミュニケーション能力の素地及び基礎を養う必要がある。また、教科化に関しては、単に中学校「外国語科」の前倒しではなく、児童自身の気付きを大切にしたい小学校「外国語科」らしい授業づくりが欠かせない。

今後、専科指導を行う教員やALT及び外部人材の活用とともに、各教員の英語力のブラッシュアップや指導力の向上が一層重要となる。本稿が、英語教育の充実に向け、取組を進める先生方への一助となれば幸いである。

最後に、本研究をまとめるにあたってきめ細かい御指導と御助言を賜った文教大学の金森強教授に厚く感謝申し上げます。

[助言者]

文教大学 教授 金森 強

## 引用文献

英語教育の在り方に関する有識者会議 2014 「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告 ～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm) (URLは2017年1月取得)

中央教育審議会 2015 「小・中・高等学校を通じた英語教育強化に関する取組について」 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/058/s](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/058/s)

[\\_icsFiles/afieldfile/2015/12/08/1365071\\_3\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/12/08/1365071_3_1.pdf) (URLは2017年1月取得)

中央教育審議会 2016 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902\\_0.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf) (URLは2017年1月取得)

文部科学省 2008 『小学校学習指導要領』 p.108

文部科学省 2015 「平成26年度小学校外国語活動実施状況調査」 [http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2015/09/29/1362169\\_02.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2015/09/29/1362169_02.pdf) (URLは2017年1月取得)

文部科学省 2016 「中学年を対象とした絵本活用に対する基本的な考え方」 [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/\\_icsFiles/afieldfile/2016/05/02/1370109\\_1\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2016/05/02/1370109_1_1.pdf) (URLは2017年1月取得)

伊藤治己 2013 「外国語活動における文字の扱い再考—文字を使つての指導と文字指導を区別しよう—」(鳴門教育大学『鳴門教育大学小学校英語教育センター紀要 第4号』) pp.27-38

岡秀夫・金森強編著 2012 『小学校外国語活動の進め方「ことばの教育」として』(成美堂)

リーパー・すみ子 2011 『アメリカの小学校では絵本で英語を教えている』 径書房 p.35

直山木綿子 2014 「小学校『英語科』教科化前にできること」(日本教育新聞2014.9.8)

米崎里・多良静也・佃由紀子 2016 「小学校外国語活動の教科化・低学年化に対する小学校教員の不安—その構造と変遷—」(小学校英語教育学会『JES journal』(16), pp132-133)

## 参考文献

中央教育審議会 2016 「小学校部会におけるこれまでの議論のとりまとめ 補足資料」 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/074/siryo/attach/1373919.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/074/siryo/attach/1373919.htm)(URLは2017年1月取得)

東京学芸大学 2016 「文部科学省委託事業『英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業』平成27年度報告書」 [http://www.u-gakugei.ac.jp/~es\\_tudy/wp-content/uploads/2016/03/h27all.pdf](http://www.u-gakugei.ac.jp/~es_tudy/wp-content/uploads/2016/03/h27all.pdf) (URLは2017年1月取得)

金森強 2011 『小学校外国語活動成功させる55の秘訣—うまくいかないのには理由がある—』(成美堂)